

山中友子隊体験村における子どもの規範形成過程に関する研究

～主として大澤真幸の身体論の視点から～

古澤 慶舟

(保健体育専修)

1. はじめに

日立市の山中友子隊体験村では「ビーイング」というプログラムが行われている。それは、大きな紙に人型の絵を書き、その中に様々なルールや目標(例えば、『人が話している時は最後まで聞くぞ』、『自分だけではなくみんなの事も考えなきや』等)を言葉にして自由に書き込んで、日々それを修正・追加して出来上がっていいく、いわば一種の規範作りである。この「ビーイング」をここでは、『社会の中で人が人と生きる上での本質的な規範を言語化したもの』と定義しよう。他者との絆の中で出来上がるこの「ビーイング」はすでに学校の現場に用いられ、様々な効果を生んでいる(栄利 2004)。「ビーイング」は、日に日に気づいたことを自由に書き足す点にその特徴があり、したがって、子どもたち1人1人の言葉がそこに残り、生身の体験が語られる。以前書いた言葉を見て、変化している自分や他者に気づくことが出来る。

本研究は、山中友子隊体験村で行われている自然体験や仲間との協同体験活動において、子どもたちが、「ビーイング」というプログラムを1つの手がかりとしつつ、人が人と生きる上での本質的な規範を形成する過程、すなわち様々な体験を身体に練り込み、それを規範にまで高めていく過程を、主として大澤真幸の身体論に準拠して考察することを目的とした。

2. 方法

- ①主として大澤真幸の身体論に準拠し、本研究の枠組みを提示する。
- ②山中友子隊体験村に参加し、聴き取り調査等を行うとともに、過去4年間の体験村の活動のビデオや報告書、追跡調査等の分析(先行研究の検討)を行い、体験村の実態を把握する。
- ③平成17年度の山中友子体験村に実際に指導・支援スタッフとして参加・観察し、子ども達の「ビーイング」を中心とした規範形成過程について記録する。
- ④それらの記録や写真、ビデオの映像、および録音テープの声等をもとに、ビーイングをも含めた子ども達の体験の内容と子ども達の身体のあり方との関連を大澤真幸の身体論から因果的に分析・考察した。

3. 結果と考察

子どもたちは、共同生活や、プログラム、フリー(遊び)の時間に、様々な他者と自己との間の求心化—遠心化作用(過程身体)を通して、他者を練り込んだ。また、班ごとのビーイングによって、それらの過程身体における様々な体験を書き込んでいき、言語化することで、目に見える形でこの規範を概念化した。日々の生活の

中では、書かれた規範と実際の行動とに矛盾もあったが、子ども達は話し合う事で、お互いの規範を洗練させていった。全体のビーイングでは、中学生のリーダーシップによって友子隊全員の規範を作り上げた。しかし、この全体のビーイングでは、各々の班別ビーイングを統合したという側面は確かにあったものの、子ども達の意識的な努力によって「こうあるべき」として以前から理性の中に存在した内容を、一般化し、言語化したという側面も多く、未だ確実に身をもって分かった内容にはなりきっていなかった。子どもたちの抑圧身体を確実にして集権身体へ移行するには、子どもたち全員に規範が生まれるほどの強烈な体験が必要だった。

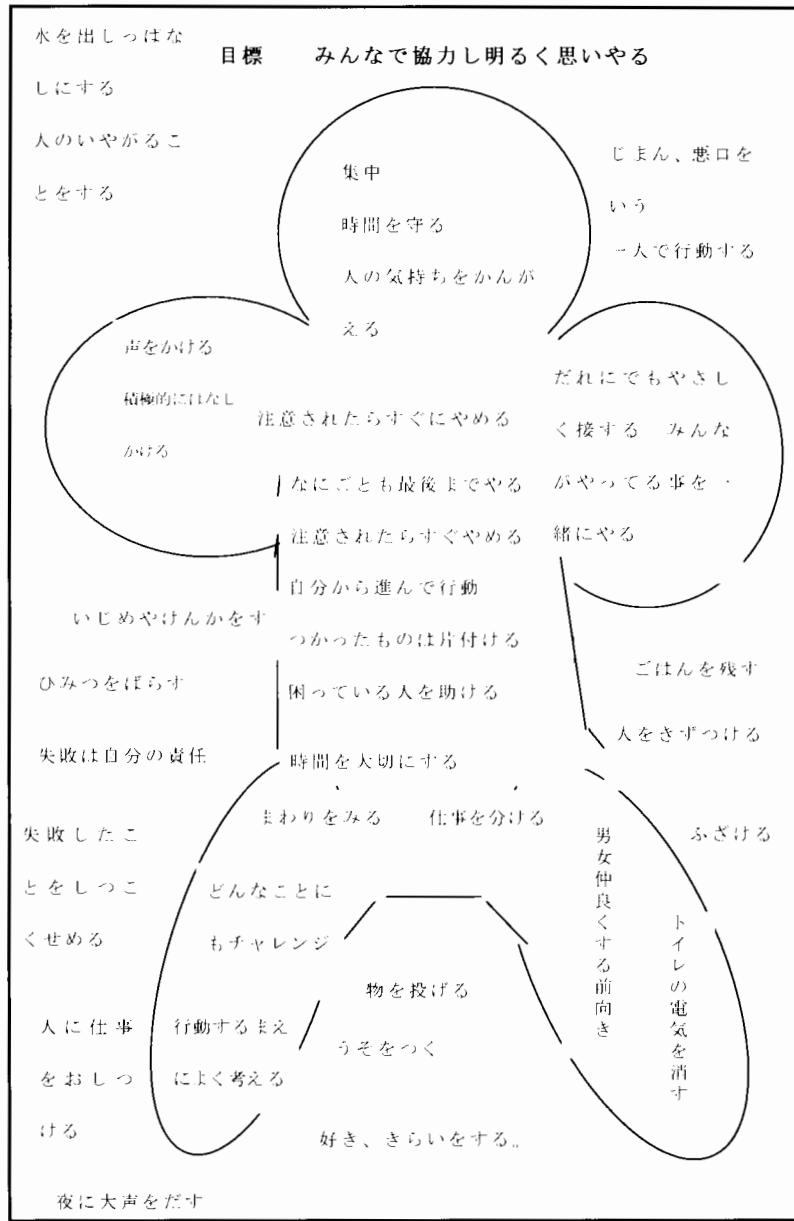


図1. 全体のビーイング

中山友子体験村の活動では、スタッフによる規範形成への仕掛け(目に見えないプログラム)がある。チャレンジプログラムの2日目、スタッフの提案で、ひとりの中学生のペースに合わせこととなり、子どもたちは、全員で「頑張れ！頑張れ！」とかけ声を出し合って、必死に追いつくことになった。3人で手と手をつなぎ、必死で歩いた。(写真1)あの時こそ、子どもたちは、確かな抑圧身体の「つながり」を体験したのである。周囲の抑圧

身体が、子ども達に涙を流すほどの強烈な体験を与えた。チャレンジプログラムで手に入れたこの複数の他者とのつながり(間身体的連鎖)こそが、子ども達が身をもって形成した規範、すなわち「仲間との絆」だったのである。そしてこの仲間との絆こそが、山中友子隊がこの夏手に入れた1番の宝物だった。子ども達は、集権身体への初めの一歩をふみだしたのである。



写真1 手と手でつながる

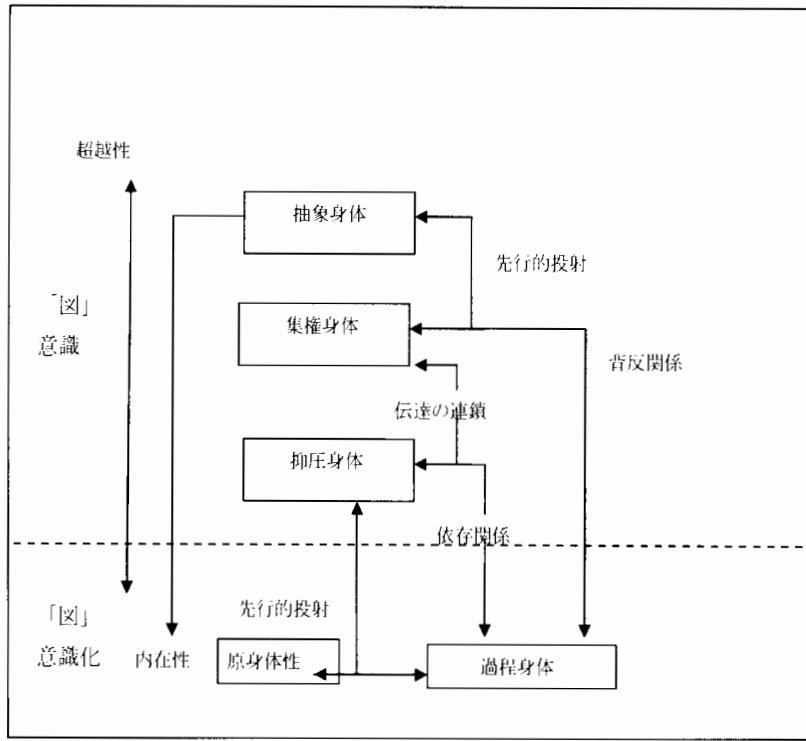


図2 大澤真幸の身体論の基本概念

子どもたちは、この強烈な体験を通して、確実に抑圧身体を完成し、集権身体に向かった。「頑張れ！頑張れ！」とみんなで励まし合いながら、声を合わせてゴールに向かった。今回のか子ども達がつかんだものは、様々な体験の過程を通じて形成された初步的な規範的価値、すなわち抑圧身体の「つながり」を体験したのである。しかしながら、それは、全員の規範・意志の統合体としての集権身体ではない。集権身体は、抑圧身体と過程身体の依存関係を基礎にして複数の抑圧身体(この場合、班ごとの規範)を統合し、伝播することで形成されるものであった。すなわち、抑圧身体の統合として働くわけだが、そのためには新たな先行的投射によって生まれた規範による意志統一・意志の伝達が行われなければならない。

集権身体、抽象身体の規範形成への過程をいかに分析するかが今後の課題である。

参考文献

- 1) 栄利滋人 「PAを生かした学級経営事例」国立花山自然の家 2004
- 2) 大澤真幸 『身体の比較社会学 I』(勁草書房 1990) p.3~p.386
- 3) 市川浩 『精神としての身体』(講談社、1992), p.1~p.199